

大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連

— 自己心理学的観点による分析と恋愛相談との関連 —

The Relationship between mature of romantic love and development of self among university students

— The analysis from self psychology theory and the relationship of romantic love consultation —

井ノ崎敦子, 葛西真記子

INOSAKI Atsuko and KASAI Makiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第34号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.34, Feb, 2020

大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連

— 自己心理学的観点による分析と恋愛相談との関連—

The Relationship between mature of romantic love and development of self among university students

— The analysis from self psychology theory and the relationship of romantic love consultation —

井ノ崎敦子*, 葛西真記子**

* 〒 673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

** 〒 772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学

INOSAKI Atsuko* and KASAI Makiko**

* Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494, Japan

** Naruto University of Education

748, Nakajima, Takashima, Narutocho, Naruto-shi, Tokushima, 772-8502, Japan

抄録：本研究は、大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討することを目的とした。大学生 352 名を対象に、自己構造の安定性に関する質問紙、恋愛様相尺度、及び主な養育者による被受容感尺度を用いて調査を実施した。交際経験のある 203 名を対象に適合性の高いモデルにおいてジェンダー差を検討した結果、男性では、自己対象体験不全が自己の発達を阻害するが、自己の発達は恋愛の発達に影響しないことが見出された。一方、女性では、自己対象体験不全が自己の発達を阻害し、自己の発達不全が恋愛の発達も阻害することが見出された。恋愛相談においては、身近な他者からの共感と助言を求める学生が多いことが見出された。これらの結果から、大学生の恋愛の発達と自己の発達が関連するという仮説が部分的に支持された。今後は、主な養育者以外との間での自己対象体験と恋愛や自己の発達との関連を検討することが課題である。

キーワード：恋愛の発達、自己の発達、大学生、自己対象、自己心理学

Abstract : This study aimed to examine the relationship between mature love and development of self among university students. In total, 352 university students completed three scales, namely the Constancy of Self-Structure scale, Scale of Immature/Mature Love, and Sense of Acceptance scale. We examined gender differences among 203 participants, who had prior experience of being in romantic relationships, using structural equation modeling. The results revealed that while both males and females displayed an obstructed development of self due to improper selfobject experiences, only females displayed obstructed mature romantic relationships due to improper development of self. We also found that the participants often needed empathetic responses and advice from their close ones regarding their romantic relationships. These findings suggest only partial confirmation of the hypothesis, which states that mature love is related to development of self. The task for future research is to examine the relationship between selfobject experiences with individuals other than caregivers, mature romantic relationships, and development of self.

Keywords : mature of romantic love, development of self, university student, selfobject, self psychology

I. 問題と目的

本研究の目的は、大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討することである。

1. 大学生の恋愛

青年期にある大学生にとって恋愛は重要な関心事の 1 つであり (相羽, 2011), 恋愛に関心をもつ場合、恋愛

における成否は青年の充実感や精神的安定を左右しうると推察される。

西平 (1981) は、世間では恋愛の危機を乗り越えるための技巧の習得を勧める言及が多く見られるが、恋愛の危機において、一時的で表面的な技巧で乗り越えようとするのではなく、自分自身にとって誠実な動き方を問うことが重要であると主張している。そして、恋愛は、恋の側面と愛の側面の両方から成る両義性を特徴として、

全人格的結合の要求に根ざすすべての感情と行動を指し、人は恋愛を通してアイデンティティを確立すると主張している。恋愛を哲学的に論考している精神分析家 Fromm も、恋愛の技術は、人格的成熟が求められる全人格的技術であると指摘している (Fromm, 1956)。

大野 (1999) は、青年の恋愛は、基本的に「アイデンティティのための恋愛」であるが、人格的発達が進み、青年期のアイデンティティの主題を解決すると、「愛」に変化すると指摘している。「アイデンティティのための恋愛」とは、親密性が成熟していない状態で、かつアイデンティティの統合過程において、アイデンティティを他者からの評価によって定義づける、または補強しようとする恋愛的行動を意味する (大野, 2010)。そして、「アイデンティティのための恋愛」の特徴として、①相手からの賛美、賞賛を求める、②相手からの評価を気にする、③相手の挙動に目が離せなくなる、④交際してしばらくすると、呑み込まれる不安を感じる、⑤交際が長続きしない、の5つを挙げている。

その一方、大野 (2010) は、「愛」を人の幸福に関心をもち、相手を幸せにしようとする気持ちと定義し、愛の本質的特徴として、相手に条件を求めないという「無条件性」と相手の喜びを自分のことのように嬉しく感じるという「相互性」を挙げている。

また、高坂 (2011) は、西平 (1981) の恋愛論に基づき、「恋愛様相モデル」を構築している。「恋愛様相モデル」では、恋の特徴として、相対性、所有性、埋没性という3つの特徴を設定し、愛の特徴として、絶対性、開放性、飛躍性という3つの特徴を設定している。そして、これらの恋と愛の特徴が、相対性と絶対性、所有性と開放性、埋没性と飛躍性という対を構成し、現在の恋愛関係は、この3つの次元上を動くパラメーターを結んだ三角形で表されるとしている (高坂, 2016)。

1つめの次元の極の1つである「相対性」とは、交際相手を他の恋愛対象者と比較したり、自分の条件や理想に合っているかで評価する傾向を指す。その対極にある「絶対性」とは、他者との比較を超えて、交際相手の欠点や短所も含めて、交際相手の存在そのものを受容し、認めることを意味する。2つめの次元の1つめの極である「所有性」とは、交際相手を物理的・時間的・心理的に占有し、交際相手の心理的エネルギーを自分に向けたままにさせようとする傾向を意味する。その対極にある「開放性」とは、相手の幸せや成長のために、自分の精神的エネルギーを与えることを指す。3つめの次元の1つめの極である「埋没性」とは、生活や意識の中心が交際相手や交際相手との関係になり、交際相手や交際相手との関係以外の事柄に対する関心や意欲が低下する傾向を指す。その対極の「飛躍性」とは、交際相手や交際相手との関係を基盤として、それら以外の事柄により一層

興味や関心が増し、挑戦や努力をすることを指す。高坂・小塩 (2015) は、恋愛様相とアイデンティティとの関連を検討し、自我発達が進んでいるほど、恋よりも愛の要素が強い恋愛関係を示すことを確認した。

以上のように、様々な研究者が、恋愛の発達と人格的成長との関連を指摘しているが、その際、人格的成長の指標として、アイデンティティを挙げている。Erikson (1959) は、アイデンティティの形成は、自我の機能の一部であると述べている。自我とは、個人が経験を組織づけ合理的な計画を立てる中枢である (Erikson, 1959)。これに対し、自己心理学を創始した Kohut は、自我が機能するためには、自己がまとまっている必要があることを指摘した。(Kohut, 1977)。自己は、自我のような心の機能ではなく、その内部にある構造であり (Kohut, 1977; Siegel, 1996)、自己が安定することによって、自我の機能性が高まると指摘した。Kohut は自己の発達こそが人格的成長の指標であると考えている (Kohut, 1977, 1984)。そこで、本研究では、自己心理学的観点から恋愛の発達と自己の発達との関連を検討することにした。

2. 自己心理学における自己の発達

自己心理学とは、Kohut (1977) が提唱した精神分析的理論の1つである。自己心理学では、人間の心の健康にとって重要なものは自己感の安定性であると考えられる (Kohut, 1977)。自己感とは、自分自身が唯一無二の尊い存在であるという実感を指す。自己心理学では、この自己感の安定性は、自己対象という、自己を喚起して維持する心の抛り所機能が十分に働くことで得られると考えられている。そしてこの体験は自己対象体験と呼ばれる。自己心理学では、自己対象は一生必要な機能であると考えられている。

自己対象として機能する代表的な対象は、親密な関係にある他者である。幼少期であれば主となる養育者であり、発達するにつれ、対象の範囲は拡大し、青年期に入ると、友人や交際相手も自己対象として機能することが期待されるようになる。対象が拡大しても、主な養育者が自己対象として機能することを求める気持ちは一生続く。

この自己対象として求める機能は、自己の発達とともに変化すると考えられている。幼少期における自己は、自己対象として機能する対象から完全に満たされることを求める。しかし自己が発達すると、自己対象として機能する対象から完全に満たされることを求めなくなる。最終的には、自己対象として機能する対象がほどほどに支えてくれるレベルで機能することに落ち着くとされる。

自己の発達を促すのは、その時々自己対象に求める欲求が満たされること、つまり適切な自己対象体験を得

ることが重要である。従って、主な養育者との間で適切な自己対象体験を得ることが、自己の発達と安定化にもつながる。

3. 自己と恋愛

自己心理学によれば、自己が発達し安定するほど、他者との間での自己対象関係も成熟する。恋愛関係は、交際相手との自己対象関係を意味する。従って、自己が発達し安定すれば、恋愛関係も成熟することが予想される。

加えて、養育者との間で適切な自己対象体験を獲得すると、自己が発達して安定し、それによって恋愛関係を発達させると考えられる。また、交際相手との間で適切な自己対象体験を得ることができれば、自己が発達し、安定すると考えられる。

しかし、前述のとおり、恋愛の発達と自我発達との関連に関する研究はいくつか存在するが、自己の発達との関連について論じたものは筆者が知る限り存在しない。

4. ジェンダーによる違い

杉村 (2001) は、青年女子は青年男子と比較すると、関係性の発達が人格発达到に影響すると指摘している。大野 (2010) も、男子学生は交際相手の女性に相談することなく就職先を決めてしまうのに対し、女子学生は、交際相手の進路に合わせて自分自身の進路を決める傾向があることから、女性はアイデンティティの主題よりも恋愛を優先させたり、同時並行させるケースが多いことを指摘している。これらのことから、自己の発達と恋愛の発達との関連においては、男性よりも女性のほうが強いことが予想される。

5. 本研究の目的

そこで、本研究では、大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連を検討することを目的とした。

主な養育者との間で適切な自己対象体験を経験している者ほど自己が発達して安定していること、そして、自己が発達し安定することによって、恋愛が発達しやすいこと、反対に恋愛の発達が自己の安定化を促進すること、さらに、男性に比べて女性のほうが自己の発達と恋愛の発達との関連が強いといった4点の仮説を設定して検討した。

II. 方法

1. 研究対象者

東海・近畿・中国地方の大学に在籍する大学生 352 名 (19 歳から 24 歳) を対象とした。授業時間の一部の時間を確保するか、研究室に訪問した上で、集団で調査を実施した。質問紙の表紙に、回答は自由意思によって回答

を選択できること、回答しなくても全く不利益を被らないこと、また、結果を個人が特定されない形で公表することを記し、回答をもって同意を得たものとした。

回答の不備がなかった有効回答者数は 300 名 (有効回答率 85.2%) であった。平均年齢は 19.29 歳、標準偏差は 1.08 であった。

2. 実施時期と実施方法

2019 年 4 月から 5 月にかけて、授業の一部の時間を使用して実施した。

3. 質問紙の内容

1) 個人属性

年齢、学年、及び性別についての回答を求めた。

2) 心理尺度

① 自己構造の安定性尺度

自己の発達と安定の程度を測定するために、「自己構造の安定性に関する質問紙」を用いた。原田 (2005) が自己心理学理論に基づいて開発した、33 項目からなる尺度であり、信頼性と妥当性が高いことが確認されている。「対象への依存」「自己拡散感」「自己誇大感」「対象からの孤立」の 4 因子からなる。「対象への依存」とは、自己構造の不安定さによる太古的な自己対象体験の希求を意味する。質問項目には、「傷ついたときには人恋しくなる」、「本当の自分を誰かに知っておいてもらわないと落ち着かない」などがある。「自己拡散感」とは、自己の凝集性が失われていることにより感じる、自己の拡散状態を指す。質問項目には、「自分のことよりも他人のことが気になる」、「自分がどう感じているかよくわからないときがある」などがある。「自己誇大感」とは、誇大自己が鏡映されず太古的なまま残存しており、鏡映されないことへの自己愛憤怒的側面を含むことによって生じる感覚を指す。質問項目には、「ちょっとでも馬鹿にされた気がする」と決して我慢できない、「世の中にはくだらない人が多すぎる」などがある。「対象からの孤立」は、自己対象関係が現実の対人場面において構成されず、自己の活力が枯渇した状態を指す。質問項目には、「私の周りには極めて特別な人物が多い (逆転項目)」、「私の周りには常に私の欲求を満たしてくれる (逆転項目)」などがある。それぞれ 7 件法で回答を求めた。

② 恋愛様相尺度

恋愛の発達の程度を測定するために、「恋愛様相尺度」を用いた。この尺度は高坂 (2015) が開発した 14 項目からなる尺度であり、信頼性と妥当性が高いことが確認されている。各項目は恋の特徴と愛の特徴を対によって作られている。「相対性－絶対性」、「所有性－開放性」、

及び「埋没性 - 飛躍性」の3次元の下位尺度の構成とした。

「相対性 - 絶対性」の質問項目には、「恋人と他の異性 / 同性（恋愛対象）を比較すると、他の異性 / 同性（恋愛対象）の方が良く見え、がっかりすることがある（相対性） - 恋人の良いところは、他の異性 / 同性（恋愛対象）と比較するまでもなく、十分にわかっている（絶対性）」などがある。

「所有性 - 開放性」の質問項目には、「恋人には、何をしているときでも、私のことを気にかけてくれるよう求めている（所有性） - 恋人が、私に気兼ねなく、やるべきことに専念できるように支えている（開放性）」などがある。

「埋没性 - 飛躍性」の質問項目には、「恋人と過ごす時間を減らしたくないので、新しいことには取り組まないようにしている（埋没性） - 恋人との関係を切り所として、新しいことにも積極的に取り組もうとしている（飛躍性）」などがある。

それぞれの次元において、「絶対性」「開放性」及び「飛躍性」に近づくほど、恋愛が発達していると考えられる。例えば、「恋人と過ごす時間を減らしたくないので、新しいことには取り組まないようにしている（埋没性） - 恋人との関係を切り所として、新しいことにも積極的に取り組もうとしている（飛躍性）」などが質問項目である。それぞれ6件法で回答を求めた。

③ 養育者への被受容感尺度

杉山・坂本（2006）により作成され、信頼性と妥当性が高いことを確認された被受容感尺度を、対象者として主な養育者に絞った形に改訂して使用した。「私は受け容れられている」、「私は信頼されている」などの8項目からなり、5件法によって回答させる。なお、主な養育者の選択肢として、母親、父親、祖母、祖父、その他の5つを設定した。

上記に示したように尺度を改訂したことから、2019年1月に大学院生63名を対象に実施した予備調査を行った。その結果、信頼性の高い尺度であることを確認した（ $\alpha = .89$ ）

3) 恋愛の悩みと相談に関する質問項目

大学生が恋愛についてどのような悩みをもつか、また、悩みをもった時にどのような相談を求めるとかを把握するために、恋愛の悩みと相談に関する質問項目を設定した。

① 恋愛の悩みの有無と内容

恋愛の悩みの有無についての回答を求めたのち、悩みをもつ者を対象に、悩みの種類についての回答を求めた。

インターネットサイトの掲示板に書き込まれている恋愛相談を参考にして、「恋愛対象への恐怖」、「恋愛成就困難」、「恋愛継続困難」、「その他」の4つの選択肢を恋愛の悩みとして設定した。これらの選択肢に複数回答可で選択することを求めた。

② 恋愛相談経験の有無、相談相手、及び要望

恋愛の悩みをもつ者を対象に、相談経験の有無を確認し、相談経験があると回答した者を対象に、相談相手として、「同性の友人」、「異性の友人」、「家族」、「先輩・後輩」、「先生」、「専門家（カウンセラーや医師など）」、「その他」の選択肢から複数回答可で回答を求めた。さらに、相談する際の要望として想定される8つの選択項目（「気持ちを受けとめて、理解してほしい」、「アドバイスがほしい」、「解決のために一緒に行動してほしい」、「つらさを慰めてほしい」、「経験談を聞かせてほしい」、「専門的な立場からの意見を聞きたい」、「その他」）を設定し、複数回答可で回答を求めた。

III. 結果

1. 回答者のジェンダー

有効回答者のうち、男性は96名、女性は203名、その他は1名であった。

2. 尺度構成

既存尺度に関して、先行研究に従い得点化した。

各尺度得点の平均と標準偏差は表1のとおりである。「自己構造の安定性に関する質問紙」においては、原田（2005）に基づき、「対象への依存」「自己拡散感」「自己誇大感」「対象からの孤立」の4つの下位尺度の構成とした。

各下位尺度の信頼性を信頼性係数によって確認したと

表1 各尺度の平均と標準偏差

		男性	女性	t 値
被受容感		32.52 (6.66)	34.34 (6.22)	-2.32*
自己構造	対象依存	44.01 (12.39)	48.32 (9.54)	-3.30***
	自己拡散	50.48 (12.92)	49.93 (10.18)	
	自己誇大	20.04 (6.23)	19.25 (5.13)	
恋愛様相	対象孤立	16.77 (4.56)	15.73 (3.39)	2.06*
	相対性 - 絶対性	22.54 (4.44)	20.44 (5.36)	2.68**
	所有性 - 開放性	22.11 (4.57)	21.32 (4.58)	
	埋没性 - 飛躍性	17.67 (3.38)	17.73 (3.40)	

上段：平均値 下段：標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ころ、「対象への依存」、「自己拡散感」及び「自己誇大感」の信頼性が高いことが確認できたが（「対象からの依存」： $\alpha = .84$ 、「自己拡散感」： $\alpha = .83$ 、「自己誇大感」： $\alpha = .73$ ）、「対象からの孤立」の信頼性がそれほど高くなかった（「対象からの依存」： $\alpha = .66$ ）。そのため、以後、「対象からの孤立」に関しての考察は慎重に行なうこととした。

「恋愛様相尺度」においては、高坂(2015)に基づき、「相対性-絶対性」、「所有性-開放性」、及び「埋没性-飛躍性」の3次元の下位尺度の構成とした。

各下位尺度全体の信頼性を信頼性係数によって確認したところ、「相対性-絶対性」と「所有性-開放性」の信頼性が高いことが確認されたが（「相対性-絶対性」： $\alpha = .80$ 、「所有性-開放性」： $\alpha = .77$ ）、「埋没性-飛躍性」の信頼性はそれほど高くないことが確認された（「埋没性-飛躍性」： $\alpha = .62$ ）。そのため、「埋没性-飛躍性」に関する考察は慎重に行なうこととした。

3. 被受容感、自己構造、及び恋愛様相のジェンダー差

被受容感、自己構造、及び恋愛様相のジェンダー差を確認するために、男性と女性の間で t 検定を実施した。結果を表1に示した。被受容感と自己構造の「対象への依存」では、女性のほうが男性よりも高いことが確認できた ($t(297) = -2.32, p < .05$; $t(297) = -3.30, p < .001$)。また、自己構造の「対象からの孤立」と恋愛様相の「相対性-絶対性」では、男性のほうが女性よりも高いことが確認できた ($t(297) = 2.06, p < .05$; $t(201) = 2.68, p < .01$)。

4. 被受容感、自己構造の安定性、及び恋愛様相間の関連

有効回答者300名のうち、恋愛経験をもつ203名(男子61名、女子142名、全体の67.7%)を対象に、男女別で、被受容感、自己構造の安定性、及び恋愛様相間の関連を調べるために、相関係数を算出した。結果は表2のとおりである。

被受容感と自己構造の間では、男女とも、「自己拡散感」、「対象からの孤立」との間で負の相関が見られた。

恋愛様相の中の「相対性-絶対性」と自己構造の間では、男性において、「対象からの孤立」との間でのみで有意な負の相関が見られた。一方、女性においては、「対

象への依存」と「自己誇大感」との間で有意な負の相関が見られ、ジェンダー差が見られた。

また、「所有性-開放性」と自己構造の間では、男性において、「自己誇大感」と「対象からの孤立」の間で有意な負の相関が見られた。一方、女性においては、「対象への依存」と「自己誇大感」で有意な負の相関が見られ、こちらもジェンダー差が見られた。

5. 被受容感、自己構造の安定性、及び恋愛様相の間の影響関係

恋愛経験をもつ者を対象に、被受容感を説明変数とし、自己構造の安定性や恋愛様相を目的変数としたパス解析を通じて、被受容感から自己構造への影響関係と、自己構造と恋愛様相との間の影響関係を検討するためのパスを用いたモデル(図1)を検討した。その結果、モデルの適合性は十分であった(GFI = .999, AGFI = .978, RMR = .055)。

先に検討した各尺度得点間の相関関係においてジェンダー差が見られたことから、このモデルをジェンダー別に当てはめた。男性でのモデルが図2、女性でのモデルが図3となる。それぞれ、有意なパス係数のみ表示している。

① 男性における影響関係

男性においては、被受容感から「対象からの孤立」への負のパスが見られるのみであった。つまり、男性においては、主な養育者から受容されていないと感じるほど、現存する他者との間で自己対象関係を構築しにくいことが示唆された。また、恋愛の発達と自己の発達には関連が見られなかった。

さらに「埋没性-飛躍性」と自己構造の間では、男性において、「自己拡散感」と「対象からの孤立」で有意な負の相関が見られた。一方、女性においては、「自己拡散感」以外で有意な負の相関が見られ、こちらもジェンダー差が見られた。

従って、被受容感や恋愛様相と自己構造の安定性との関連においては、ジェンダー差が見られることがわかった。

② 女性における影響関係

女性においては、被受容感から「自己拡散感」へ負の

表2 被受容感、恋愛様相と自己構造との相関

		対象依存		自己拡散		自己誇大		対象孤立	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
被受容感		-.09	-.08	-.36**	-.27**	-.13	-.09	-.43**	-.17*
恋愛様相	相対性-絶対性	-.03	-.25**	-.01	-.13	0	-.20*	-.33**	-.06
	所有性-開放性	-.22	-.30**	-.21	-.14	-.31*	-.20*	-.31*	-.08
	埋没性-飛躍性	-.03	-.17*	-.25*	-.14	-.14	-.25**	-.41**	-.26*

* $p < .05$, ** $p < .01$

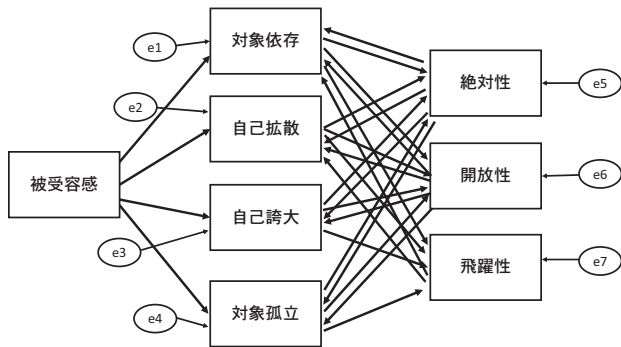
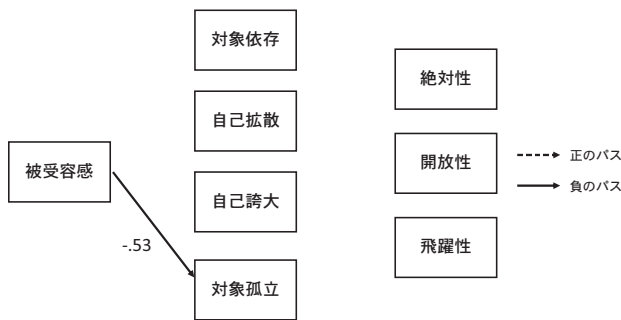
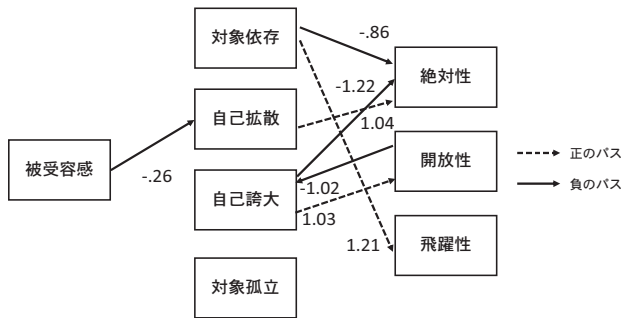


図1 被受容感, 自己構造, 及び恋愛様相のパスダイアグラム



* 図をわかりやすくするために、誤差変数の表示を削除しています。

図2 被受容感, 自己構造, 及び恋愛様相のパスダイアグラム (男性)



* 図をわかりやすくするために、誤差変数の表示を削除しています。

図3 被受容感, 自己構造, 及び恋愛様相のパスダイアグラム (女性)

パスが見られ、その後、「絶対性」へ正のパスが見られた。また、「対象への依存」と「自己誇大感」から絶対性へ負のパスが見られた。さらに、「対象への依存」から「飛躍性」へ正のパスが見られた。また、「自己誇大感」と「開放性」との間では、「自己誇大感」から「開放性」へ正のパス、「開放性」から「自己誇大感」へ負のパスが見られた。

つまり、女性は、主な養育者との間で適切な自己対象体験が得られないほど、自己のエネルギーが枯渇し、交際相手の存在そのものを受容し認めるようになる。

また、未成熟な依存が高いほど、交際相手を他の恋愛対象と比較し、交際相手や交際相手との関係を基盤として、それら以外の事柄により一層興味や関心が増し、挑戦や努力をする傾向がある。

さらに、自己誇大感が高いほど、交際相手を他の恋愛

表3 交際経験有無別の平均値とSDおよびt検定の結果

	交際経験あり		交際経験なし		t 値	
	M	SD	M	SD		
被受容感	34.34	6.02	32.45	7.02	2.39*	
自己構造	対象依存	47.21	10.94	46.33	10.14	0.66
	自己拡散	48.81	10.71	53.22	11.70	-3.11***
	自己誇大	19.36	5.72	19.88	5.03	-0.76
対象孤立	15.41	3.91	17.63	4.18	-4.46***	

* $p < .05$, *** $p < .001$

対象と比較し、相手の幸せや成長のために、自分の精神的エネルギーを与えるようである。しかし、相手の幸せや成長のために、自分の精神的エネルギーを与えるほど、自己誇大感は低くなる傾向がみられる。

6. 交際経験の有無による自己構造及び被受容感の比較

交際経験のある者とない者との間における自己構造や被受容感の差を確認するために、t検定を実施した。結果を表3に示した。

その結果、自己構造では、「自己拡散感」と「対象からの孤立」が、恋愛経験のある者のほうが、恋愛経験のない者よりも低いことが確認できた（自己拡散感： $t(298) = -3.22$ $p < .001$ ；対象からの孤立： $t(298) = -4.46$ $p < .001$ ）。被受容感は、恋愛経験のある者のほうが、恋愛経験のない者よりも高いことが確認できた（ $t(298) = 2.39$ $p < .05$ ）。

7. 恋愛の悩みと相談の状況

1) 恋愛の悩みの有無と内容

恋愛の悩みをもつ者は、199名（66.3%）であった。そのうち、悩みの内容が「恋愛対象への恐怖」である者が57名（28.6%）、「恋愛成就困難」である者が106名（53.3%）、「恋愛継続困難」である者が100名（50.3%）、「その他」が20名（10.1%）であった。

2) 恋愛相談の状況

恋愛の悩みをもつ者のうち、相談経験者は171名（85.9%）であった。相談の相手が「同性の友人」であった者が160名（93.6%）、「異性の友人」が101名（59.1%）、「家族」が36名（21.1%）、「先輩・後輩」が38名（22.2%）、先生が13名（7.6%）、専門家が0名、その他が5名（2.9%）であった。

相談において相手に求めることでは、「気持ちの受けとめと理解」が128名（74.9%）、「アドバイス」が133名（77.8%）、「一緒に解決行動」が27名（15.8%）、「つらさの慰め」が55名（32.2%）、「経験談」が92名（53.8%）、「専門的立場からの意見」が6名（3.5%）、「その他」が7名（4.1%）となった。

IV. 考察

1. 被受容感, 自己構造, 及び恋愛様相のジェンダー差

女性のほうが、養育者から受容されていると感じるとともに、太古的な自己対象欲求傾向が見られた。一方、男性のほうが、自己の活力が枯渇しており、交際相手を唯一無二の存在と認識していた。

女性は、自身を養育者と別の存在として認識しない中での情緒的つながりを感じていることが予想される。そのため、自己の活力は維持されるとともに、交際相手を自己対象として機能することを期待しすぎることはいと考えられる。

一方、男性は、養育者とのつながりが薄いと感じており、自己の活力が枯渇しやすいことから、交際相手への自己対象として機能することの期待が交際相手に集中しやすいと推察される。これは、男性の方が女性よりも交際相手をより精神的な支えにしていることを見出した伊福・徳田(2006)や水野(2002)とも一致する見解である。

2. 被受容感, 自己構造の安定性, 及び恋愛様相の間の影響関係

結果から、主な養育者との間で適切な自己対象体験を経験している者ほど、自己が発達し、自己が安定しやすいことが見出された。また、男性に比べると、女性のほうが、恋愛の発達と自己の発達との関連が強いことが見出された。これらの結果は、仮説をおおよそ支持した結果となっていた。ただし、本研究の結果からは「開放性」「飛躍性」は、成熟した恋愛の指標として捉えるには不十分であり、「絶対性」のみが成熟した恋愛の指標とすることが可能であることが示唆された。

本研究においては、対象が学生生活への適応度に問題のない学生が多かったことが、自己対象体験、自己の発達、及び恋愛の発達の間での影響関係が仮説どおりに明確な形で見られなかった要因の1つであると考えられる。そこで、適切な自己対象体験を得ることが不足していたと思われる学生を対象とした事例研究などを通して、自己対象体験、自己の発達、及び恋愛の発達の間での影響関係をさらに検討することが求められる。

また、今回の調査では、ジェンダー別の標本数の偏りが大きかったことから、偏りの少ない場合に同様の結果が示されるか確認する必要がある。また、青年期になると、自己対象体験は、主な養育者以外の他者、例えば教師や友人など拡がりができるので、そうした自己対象体験の総合によって自己の安定が支えられていることが考えられるため、そうした対象からの被受容感なども検討する必要があると考えられる。

さらには、セクシュアリティの違いによっても関連の

仕方が異なる可能性もある。その点も今後の検討課題である。

3. 恋愛経験の有無による自己構造と被受容感の違い

結果で示されたように、恋愛経験のある者は、ない者に比べると、養育者から受容されていると感じ、自己が安定していることがわかった。恋愛は、互いが深く認め合う関係性であり、そこでは自己対象関係の成立による自己対象欲求の充足が行なわれていると考えられる。本研究の結果から、養育者から受容されているという実感をもつことが恋愛関係を成立させる前提として必要であると推察される。また、本研究の結果から、恋愛関係が継続しているかどうかに関わらず、一度でも恋愛関係を構築したことのある者は、自己が安定しやすいと考えられる。なお、高坂(2014)もアイデンティティとの関連において同様の傾向を見出している。

また、自己構造の中で「自己拡散感」と「対象からの孤立」では交際経験の有無で差が見られた一方、「対象への依存」と「自己誇大感」では差が見られなかったが、これは前者2つに比べて、原初的な要素である後者2つの安定度が、交際経験と関連があることを示唆していると考えられるが、これらの点についてはさらなる検討が求められる。

4. 恋愛の悩みと相談の状況

恋愛の悩みをもつ者が全体の約7割を占め、多くの学生が恋愛の悩みを抱えていることが伺えた。学生にとって恋愛関係の構築と継続が簡単なことではないことが推察される。また、悩みを抱えた場合、ほとんどの者が他者に相談することで解決しようとしており、その相手として、友人を選択することが多いことが伺えた。また、相談相手には、気持ちの理解とアドバイスを求める者が多く、似たような立場で信頼できる他者に共感と助言を求めることが恋愛問題の解決に有効であると考えていることが示唆された。自己心理学的観点から考えると、共感や助言は、自分の存在価値を認めて欲しいという鏡映自己対象欲求の充足であったり、判断力や行動力があると評価している他者から心理的に支えられたいという理想化自己対象欲求が満たされる体験につながっていることから、相談相手に共感や助言を求めることは、自己対象体験欲求の現れであると推察される。本研究における調査では、専門家を相談相手に挙げた者は皆無であったが、先生を挙げている者が数名存在した。友人に相談しても解決できない、あるいは友人には相談しづらい恋愛問題を抱えている場合には、専門家への支援を求めることも考えられる。その場合においても、彼らが共感や助言を求めることで恋愛問題が解決するといった自己対象体験を得ることが重要であり、そのことが、恋愛の発達

と自己の発達を促すことにつながることを期待される。

また、友人関係を構築することすら難しい学生も存在することも予想される。その場合、恋愛に関して悩んだ際は、自分自身の中で抱え込むことで、友人に相談できる学生に比べて、自己が不安定になったり、精神的なバランスを崩すリスクが高くなることが予想される。そこで、今後は、友人関係の状況と併せた分析が期待される。

V. 引用文献

相羽美幸 2011 大学生の恋愛における問題状況の特徴 青年心理学研究, 23, 19 – 35.

Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle. (Psychological Issues Vol.1. Monograph1.)* New York: International University Press. (西平 直・中島由恵 (訳) 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房).

Fromm, E. 1956 *The art of loving.* Harper & Brothers Publishers, New York. 鈴木晶訳 1991 新訳版 愛するという事 紀伊国屋書店.

原田和典 2005 親との自己対象体験と自己構造の関連性についての実証的研究, 日本心理臨床学研究, 23 (4), 434 – 444.

伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究, 5, 157 – 162.

Kohut, H. 1977 *The restoration of the self.* International Universities Press. (本城秀次・笠原嘉監訳 1995 自己の修復 みすず書房.)

Kohut, H. 1984 *How does analysis cure?* The University of Chicago Press. (本城秀次・笠原嘉監訳 1995 自己の治癒 みすず書房.)

高坂康雅 2011 青年期における恋愛様相モデルの構築 和光大学現代人間学部紀要, 4, 79 – 89.

高坂康雅 2014 大学生の恋愛関係の継続／終了によるアイデンティティの変化 青年心理学研究, 26, 47 – 53.

高坂康雅・小塩真司 2015 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26, 225 – 236.

高坂康雄 2016 恋愛心理学特論—恋愛する青年／しない青年の読み解き方 福村出版

水野邦夫 2002 恋愛・友人関係観の性差に関する研究 聖泉論叢, 10, 81 – 92.

西平直喜 1981 友情と恋愛の探究 (青年の世界3) 大日本図書

大野 久 1999 人を恋するという事. 佐藤有耕(編) 高校生の心理: 1 広がる世界 大日本図書, 70 – 95

大野 久 2010 青年期の恋愛の発達 大野 久 (編)

シリーズ生涯発達心理学: 4 エピソードでつかむ 青年心理学 ミネルヴァ書房, 77 – 105.

Siegel, A. M. 1996 *Heinz Kohut and the psychology of the self.* Routledge. (岡秀樹訳 2016 コフォートを読む 金剛出版.)

杉村和美 2001 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究, 12(2), 87 – 98.